

経済建設常任委員会

視察調査報告

委員長 松浦和浩

経済建設常任委員会（松浦・橋本・古館・平野・岡本・柏葉）は7月12日から17日までの間、道外の5市町を訪問し、観光振興や特産品開発、市街地活性化について視察調査を行いました。ここでは、視察先の中から二つの取り組みをご紹介します。

福井県おおい町は、平成18年3月に旧大飯町と旧名田庄村が合併して誕生した町です。海に面した大島地域には西日本最大の電力供給基地・大飯原子力発電所があり、人口9千人ながら



美幌町の予算規模を大きく上回る、財政力豊かな町でもありません。

視察先の名田庄商会は、昭和59年7月に旧名田庄村と商工会J A、森林組合が200万円を出資（3千万円まで増資）して設立した第3セクターです。過疎化や高齢化によって村が衰退するとの危機感から、特産品の開発・販売で活路を見出そうと事業を展開。現在では道の駅や物産館、町営の宿泊施設の管理運営も請け負っており、従業員はパートを含め約60名を雇用しているとのこと。

設立当初から「毎年2品の商品開発」を合い言葉に特産品づくりを続け、これまでに開発・販売した商品は60品を超えますが、市場の評価が得られず販売を取りやめた商品もあります。

主力商品は地元野菜で漬けた「名田庄漬」と自然薯を麺にすり込んだ「名田庄そば」で、時間距離で2時間の位置にある京阪地区を中心に、販売実績は順調に推移しているとの説明を受けました。原料になる野菜や

自然薯は、規格外も含めてすべて地元農家から仕入れているのですが、1戸あたりの耕作面積がわずか3反と狭いこと、手作業中心の野菜農家を若者が敬遠することなどから、後継者不足が大きな課題とのこと。

売れる商品ではなく、売れた商品をつくればいいとの考え方は大変興味深く、地域への利益還元を優先したことが結果として成功に結びついたとの言葉が印象に残りました。

福井県越前市は、平成17年10月に1市1町の合併で誕生した人口8万3千人の街です。伝統産業から先端産業まで幅広い分野の企業が立地する、県内有数の産業都市でもあります。

市街地の拡散が進む中、歩いて暮らせるまちづくりを進めるべきとの考えから、平成19年11月に中心市街地活性化基本計画を策定。市街地の再生とコンパクト・シティを目標に掲げていますが、空店舗対策・開業支援に的を絞って調査しました。

市は、駅前の123号を中心市街地のエリアに定め、まちなか観光・まちなか居住・まちなか活動の各種事業を展開しています。視察目的である空店舗対策・開業支援は、まちなか居住推進策の一つに位置づけられて



おり、中でも「地域助け合いビジネス事業」は市の商工政策課が最も力を入れている取り組みです。

空店舗を活用し、市街地の活性化に寄与又はまちなか型の新事業を始める者を対象に、事務所・店舗の光熱水費や販売促進経費に加え、開業時の臨時的な経費を助成する制度です。開業からの3年間、総額120万円を限度に助成しますが、関係者で構成する審査会が事業計画を審査し、認定することが条件です。18年度以降、23件の出店があつたとのこと。

他にも、空店舗を借りて開業する際の家賃を助成する「空店舗活用支援事業」や、既存店を対象に、まちなかを回遊する観



光客のために休憩所やトイレを整備してもらおう「おもてなしの店推進事業」に取り組んでいるとの説明がありました。

車社会に対応するため、店舗に改装した白壁の蔵が立ち並ぶ集客エリア「蔵の辻」周辺の市道の駐車禁止を解除するため、警察にねばり強く理解を求めて実現するなど、危機的状況の打開に本気で取り組んでいる姿勢が伝わってきました。

以上、視察先の取り組みをご紹介しましたが、今回の視察で得られた情報を基に、美幌町の政策課題にしっかりと意見反映できるよう、今後も委員会としての調査活動を続けて参ります。